

「存在論的建築論」ということ(一)

西村 謙司 日本文理大学 工学部建築学科

1. 「建築的思惟について——存在論的建築論のために」の位置

本稿では、増田友也による「建築的思惟について——存在論的建築論のために^①」(以下、「建築的思惟について」と表記する。)を讀解することによって、「のために」と、増田が希求した「存在論的建築論」という言葉の意味する内容を明らかにすることを試みる。

「建築的思惟について」(1973年9月・1975年12月)は、増田友也の後期思索の代表的な論文のうちの一つで、『ある風景について——正法眼蔵における空間と時間』(1969年3月)、「建築なるものの所在について——ある仮設」(1972年7月・73年12月加筆)を含む「3つの論考が、増田の至り得た後期の思索の在りどころを示す」と言われている^②(以下、『ある風景について』、「建築なるものの所在」と表記)。

まずは、「建築的思惟について」の後期思索における位置づけを確認するために、それが公刊されるまでの経緯を簡単にみておきたい。

『ある風景について』の執筆は、戦後復興による急激な国土開発、それともなあって起きた京都の景観論争に端を発している。京都の景観問題に際して、増田は、「京都の風景をまもる^③」ことは誰も反対しないが、「まもらるべき京都の風景とは何であるか^④」については、何人も語らないと指摘している。すなわち、急激な国土開発によって破壊されていく日本固有の風景に対して、それをまもることの重要性は多くの人に共感されうるが、まもられるべき風景とは何であって、建設者がその歴史的風景をまもりつつ創り出す形態と風景が如何にあるべきかという問いに対して応える気運が無いことを問題視している。

増田はまた、「風景」なる観念が、歴史的にこの国において重視されるとともに、それが建築的空間構成の重要な契機となっていることを指摘する。巖島、道元、夢窓疎石、雪舟、近世絵画に見出された「風景」が、この国の風土に即して独自に提起されたものであり、まもられるべき日本的風景のあり様を示していると見て、自らの建築活動におけるアイデンティティーの確認とし

① 増田友也：『増田友也著作集Ⅳ 風景論 存在論的建築論』、pp.225～329、ナカニシヤ出版、1999年所収(以下、同書籍を参照する場合に限り、ページ数のみを記す)。(初出は、『建築雑誌』、pp.917～922、日本建築学会、1973年9月、および、人間・建築・環境六書編集委員会：『人間・建築・環境六書-6 歴史と未来』、pp.181～256、彰国社、1975年)。

② 前田忠直：『連載 増田友也の企て(3) 建築以前への問い』、p.32、『近代建築』69巻、近代建築社、2015年11月。『ある風景について——正法眼蔵における空間と時間』は、pp.21～101所収。(初出は、私家本、1969年3月)、『建築なるものの所在について——ある仮設』は、pp.103～223所収。(原稿は、1972年7月・73年12月加筆)。

③ 増田友也：『増田友也著作集Ⅰ 建築・空間・表現』、p.214、ナカニシヤ出版、1999年(初出は、『建築のある風景』第4回、日刊建設通信、1964年7月29日付)。

④ 増田友也：『増田友也著作集Ⅰ 建築・空間・表現』、p.214、ナカニシヤ出版、1999年。

て、これらの風景を丹念に見直している。その内容は、同時期に執筆された「家と庭の風景^⑤」に記されており、歴史を顧みながら日本の空間や風景の特質を究明するとともに、その中核を道元の見出した「山河大地」の風景としていっている。大学の授業でも、1966年から3年間にわたって、道元の『正法眼蔵』を取り上げ、「風景論」の講義を行うようになった。その授業草稿が繰り返し推敲されて公開されたものが、『ある風景について』である。

⑤ 増田友也：『増田友也著作集Ⅲ 家と庭の風景』、ナカニシヤ出版、1999年（冒頭に1964年秋の日付をつけた「はしがき」が載せられている）。

前田忠直が、「論考「ある仮設」は、当初『人間・建築・環境六書』（彰国社刊）のために書かれたものであるが、分量が多くなり、別に、ハイデガーの存在論に即したところが書き直され、「建築的思惟」として公表される^⑥」としていっているが、「建築なるものの所在」（前田はこの論文を「ある仮設」としているが、ここでは「建築なるもの」が主題となっていることを明示するためにこのように表記する）の冒頭にも、「小論は、稲垣栄三助教授の慫慂によって 同氏の編集される 建築学基礎講座第六巻 のために考え 書いたものである——課題は 建築論 について であったが、筆者はそれを 建築 とは何か を問うことから始めようとした(p.104)」とあることから、稲垣からの論文依頼に対して、論考を重ね、その論述として、「建築なるものの所在」が執筆されており、その目的が、「建築論」あるいは、「建築とは何か」の問いに答えることであったことを確認することができる。しかし、実際には、この論文は増田没後に刊行された『増田友也著作集』の出版まで公表されることがなかった。その代わりに、「建築なるものの所在」の論考を元に、ハイデガーの存在論に即して論述された「建築的思惟について」が公開されたのである。すなわち、「建築的思惟について」は、以下で説明するように、分量と時期を変えて二種類公開されているが、その元として、「建築なるものの所在」があったということを知ることができるのである。

⑥ 前田忠直：「連載 増田友也の企て(3) 建築以前への問い」, pp.32~33, 『近代建築』69巻, 近代建築社, 2015年11月。

本論考の最後に自ずから明らかになるが、増田の後期思索の代表論文となる上記三つの論文（実際には「ある時間について」を含み、「建築的思惟について」(一)、(二)を加えた五つの論文）は、別々の課題を取り上げた論文などでなく、増田が一貫して追究しつづけた「風景」、「空間」、「建築」の問いへの論考が、その都度、論述され、建築論としてまとめられたものとして捉えることができる。そして、本稿では、その後期思索が集約された論考となる「建築的思惟について」を取り上げ、その形式的特徴を明らかにして内容を読解することによって、増田が「存在論的建築論」と言って論考・論述したことの意味を明らかにしたいと考えている。

2. 「建築的思惟について——存在論的建築論のために」の形式的特徴

先述したように、増田によるこのタイトルの文章は、二種類公刊されている。一つは、「現代の建築思潮の動向」というテーマで行われた日本建築学会建築意匠部門の研究協議会の研究内容を公表するものとして『建築雑誌』昭和48年9月号に掲載されたものである。これは、『増田友也著作集』第4巻に「建築的思惟について——存在論的建築論のために(一)」として再掲されている(以下、本稿ではこの論文を(一)とする)。もう一つは、彰国社から昭和50年12月に刊行された『人間・建築・環境六書 第6巻 歴史と未来』という書籍に掲載された論文である。この書籍は、稲垣栄三が編集委員となって編集しているもので、第6巻の冒頭に稲垣による「歴史と未来」に関する解説が記されており、これが「人間・建築・環境」と「歴史」(過・現・未の時間)を主題としてまとめられた論文集であることを確認することができる。また、(一)と同様、『増田友也著作集』に「建築的思惟について——存在論的建築論のために(二)」として再掲されている(以下、(二)とする)。

(一)と(二)の異同を確認しておくならば、タイトルは同名であるが、掲載された書籍が異なっている。つまり、両者ともに執筆依頼に応じて公刊されたものと考えられるが、その依頼の主旨が異なっていると推察される。そのことは内容に表現されているであろうが、本稿ではこの点に関して、直接には触れない。決定的に異なっているのは、総文字数である。(一)は総文字数が約16,000字で、(二)は約70,600字となっており、およそ4.4倍の文章量となっている。これだけ文字数が異なっている論文が同じタイトルであるというのも不思議であるが、これに関しては後に触れる。(一)と(二)の間には、2年間のタイムラグがあり、2年間の増田の思索の深まりが(二)に投影されているのであろう。

(二)が、(一)の4.4倍の分量という点に関して、改めて、全体を比較して見直してみると、いくつか気づく要点がある。一つは、全体構成の枠組みを決める「目次」にあたる「章立て」であるが、(一)では、章立ての項目名が明確に記されておらず、(二)では、項目名を明示して章立ての分節が行われている。内容を読み比べて確認すると、両者ともに、(二)で表示された項目名によって分節された章立てによって論考が進められていることがわかる。

この章立て(目次)は、建築設計で言うところの構造を決める基準線にあたるものであるが、論文において、章立てが同じということは、(一)も(二)も同じ枠組み(構造)に拠って全体が構成されていると解しうるように思われる。つまり、(二)は、文章量が多いのであるが、それはあくまでも、(一)の内容を補完する仕方書かれていることによると推察される。そのことは、増田がそれまでに執筆してきた論文の制作方法を見返してみることによって

も確認できる。増田の手稿群を見直してみると、原稿用紙に定著された文章に、その上から、何度も加筆して用紙が文字だらけになったものをいくつも確認することができる。『ある風景について』では、私家本として公刊されたものに対して、何度も加筆して修訂してあるものがある(少なくとも5冊確認する)。それらを見ると、先ず、論文を書き始める前に、大きな枠組みを定め、それを目次として表記し、その章立てに沿って論文を書き始めていることが確認できる。それは、一旦、全体を通して書かれるが、その全体像が仮にできあがった段階で、それら全体を否定的に見返すかのようにして、それまでの原稿全体に手が加えられ、その文章の行間の隅々にまで新たな文章が加筆・挿入されていく。もちろん、文章の挿入は、文書の削除をともなっている。それが何度も何度も繰り返され、すなわち、「推敲」が徹底して行われるなかで、時間の締切とともに、公表されるといった具合のようである。上述したように、公表された後も決定稿に上書きするように加筆し、数年間「推敲」を繰り返しているものもある。おそらく、建築設計も同様の仕方で行われていたと推察され、建築設計のエスキースの繰り返しと同じように論文執筆を行っていたと見ることができる。その様子は、まさに建築家として、論文を執筆し、作品を制作するという一貫した姿勢が貫かれているようである。

また、(一)と(二)の枠組みが基本的に同じであるということは、「建築的思惟について」の(二)で、(一)の重複部分をマークしてみることによって確認できる。(二)では、章立てが明確にされており、それが10の項目によって分節されている。その10項目ごとの枠組み内に、(一)の文章が、各章ごとに、まとまりをもって記されていることを確認することができれば、枠組みの相同性を認めることができる。また、(二)で、(一)との重複部分をマークすると、その「地」として、(二)のオリジナルな部分が浮かびあがる。それが全体のどの部分にどのように配置されているかを確認してみると、次の二つのあり方があることを知ることができ、その特徴からも相同性を確認できる。

その一つは、(二)のオリジナルな文章が、(一)の文章の行間や文間に、断片的に挿入(・削除)されている仕方で加筆されている場合である。これによって、(一)の内容を構成する文の分量が肥大化することになるが、そのように肥大化しながらも、(一)で記された文章の内容を保持・補完しながら、文章構成の順番も変えることなく、配置されていることを確認することができる。これは、(一)の文章で言葉足らずであった部分に対して、新たに加筆することによって、その真意を明確にしようとする意図をもった補完である。

もう一つは、(一)で触れることができなかった課題を、(一)で構成された全体の枠組みをまもりながら、適切な配置場所を選んで、まとまりのある

文章群(段落以上にわたることもある)を挿入する仕方である。この加筆は、膨大な分量となっている場合もあり、この内容が(二)のオリジナリティーを形成しているとも言える。

その(二)の文章は、(一)の4.4倍にもなっているので、そのことにより、(一)の抜本的な校正が行われていると見られるが、ただし、それは、全く別の枠組みを構築して新たな文章を作成するという仕方で行われるのではなく、それまでに記された文章の文脈に拠りながら、つまり、増田自身が積み重ねてきた論考・論述の枠組みを基本的には踏襲しながら、同時に、その全体を否定的に深化させる仕方で、論考・論述が行われており、増田自身が建築活動に際して大切にしてきた歴史的 *Geshichte* 制作姿勢と同様に、論文執筆が行われていたと見ることができる。

また、この論文の特異な形式的特徴として、数多くの傍点が打たれていること、あるいは、特に、(二)に該当するが、短歌のように、読点ではなく、一文字の空白によって文章内の文を区切っていることの二点が挙げられる。

前者の、傍点に関しては、本論文の最重要キーワードである「存在、有」を意味する「ある」に関する言葉に打たれているが、この「ある」に付された傍点付きの表記は、我々が日常的に何となく気づきながらも無自覚に使っている「ある」という言葉を改めて強調されることになるが故に、あるいは、それ故に、それが膨大な数におよぶため、この論文の読解を困難にしている。これに関しては、増田自身が論文の末尾で、「ある」ということ〈存在、有〉を主題とするとき、それが主語となって名詞化するの言葉の当然ではあるが、あるという事象それ自身は、どこまでも動詞として把持されていなければならぬ(p.328)」としており、ハイデガーがドイツ語で *Sein* と表記した言葉を名詞的に捉えられやすい「存在、有」を訳語としてあててのではなく、「ある」として意図的な論述を行っていることを確認することができる。それ故に、術語として使われている *Sein* を指示する言葉が、日本語の述語「がある」(事実存在)、「である」(本質存在)の「ある」(あるいは、「或る」の「ある」)と重なって、論文自体の読解を困難にもしている。

加えて、後者の一文字の空白文字による字組に関しても、「行文の字組に特別な配慮を加えたのは、存在論に固有なこれらのことを際立たせるためばかりではなく、読むということが思惟することにはかならぬとして、そのように思惟することを惹き起こしたいためにほかならぬ(p.328)」としており、空白によって表記された余白の意味をくみ取りながら、思惟しつつ読むことが期待されている。特に、「有」を主題とする(一)に対して、(二)は、「無」の問題が主題化されており、その意味でも、〈空白

文字〉すなわち、□の表記が大切にされて、文章全体に織り込まれているものと考えられる。

そのように、増田の独自の配慮によってなされた特別な表記方法であるが、まずは、論文を読む前に、増田による傍点⁷が、どの言葉に打たれているかを見ておきたい。それが、この論文の読解支援の一つになるであろうからである。

確認すると、(一)では、「ある」、「もの」、「である」、「がある」、「ありうる」、「あらしめられる」、「あり」、「ありどころ」、「のために」という言葉に傍点⁷が打たれている。先述したように、「ある」は、術語 Sein を意味する場合と述語として使われている場合の双方に打たれており、その分別が読解のポイントになる。

また、(二)では、(一)に対して、「無」を意味する「ない」、「なくなり」、「なくなる」、「ありえない」、「あらず」、「あらぬ」、「あろう」、「ともにある」が付加されている。

上記の鍵語を漢字で記せば、以下のようにまとめることができようか。

有、無、為、所、物、共、不。これらの文字の意味するところは、論考の全体を通してキーポイントとなっていると考えられる。

加えて、(一)と(二)の比較で言えば、(二)では「無」が加えられており、(一)との大きな相違点を知ることができる。形式的な空白文字の表記による強調表現や内容の解釈からも、(二)がハイデガーの存在論を根底から捉え直すことが試みられていると推察されるが、それが「無」(空)という言葉に集約されていると見ても悪くはなさそうである。しかし、本稿では、先ず、「建築論的思惟について」の大筋を確認したいため、「無」の議論を省いた(一)のみに焦点を当てて、「建築論的思惟について」の解釈を行うことにする。「無」(空)に関する論考は、別稿「(仮称)『建築論的思惟について』ということ(二)」にて、再解釈を試みることにする。

次に、上記のキーワードに、「建築」に関する鍵語を含めて、論文内のキーワード使用件数の確認をしておきたい(表1。「ある」、「もの」は、重複した使用例が多くあるが、検索は、それぞれの言葉を検索語として数値調査を行っているため、複合語を割り引いてみる必要がある)。

このデータを見ると、「ある」、「もの」の使用例が圧倒的に多いが、「そのこと」や「あるそのこと」、「あるもの」の使用例が際立っていることを確認することができる。そこで、本稿では、「建築的思惟について」の読解にあたって、その読解へ、補助線を与えることとして、「あるもの」を「あるもの」として表記し、「あるそのこと」を〈あるそのこと〉と表記して解釈を行うことにする⁷。そうすると、実は、この論文全体にわたって課題となっている「存在的」と「存在論的」の対比的課題に、「あるもの」と〈あるそのこと〉がそのまま重なり合っ

⁷ 「あるもの」とは、無なるものではないところの、ありとあらゆる「あるもの」(p.232)とされている。また、「あるそのこと」が、「そのもの」をあらしめるゆえに、「そのもの」は「あるもの」である(p.230)としている。加えて、「あるそのこと」自身は「あるもの」ではなく、その意味では、あるのではない、それは「あるもの」ではないこと、つまりは、無なるもの Nichts にほかならぬ(p.231)と言う。

表1 論文内のキーワード使用件数

キーワード	(一)での件数	(二)での件数
建築的思惟	0	0
建築なるもの	10	73
建築する	15	52
ある	512	1,359
もの	274	1,014
そのこと	199	668
あるそのこと	161	349
あるもの	134	384
そのもの	26	286

構成されていることを確認することができ、読解しやすくなるのである。以下、この括弧付きの条件を設定した上で本論考を進めたい。

加えて、(一)と(二)の比較で、(一)では「建築」という言葉の使用例が、「ある」と比較して、極端に少ないことも見て取れる。しかし、(二)では、「建築」の使用例が増えており、このことも(二)の論考の特徴として押さえておくことができよう(「そのもの」も同様に(二)で使用例が増えている)。

次に、「建築的思惟について」の論考において、増田が援用したハイデガーの存在論の具体的内容に関して少し触れておきたい。

先の引用で前田が、この論文が「ハイデガーの存在論に即した」ものになっているとしているように、「建築的思惟について」とハイデガーの存在論は切り離せない関係がある。この指摘から類推すると、副題「存在論的建築論のために」の「存在論」は、ハイデガーの存在論のことを指していると解され、本論文が、ハイデガーの存在論を前提とし、ハイデガーの存在論のように、彼のために umwille seiner、「根源的な」建築論の構築をめざしていると推察できる。また、ここでの「存在論」がハイデガーの存在論であることを明らかに表示するように、(二)の論文末尾に参考文献として、以下の文献とハイデガー研究者による文献が列記されている。

前期論文

- *Sein und Zeit*, 1927 「有と時」、「存在と時間」

後期論文

- *Der Ursprung des Kunstwerkes*, 1939 〈HW〉「芸術作品の根源」
- *Das Ding*, 1950 〈VA〉「物」
- *Bauen, Wohnen, Denken*, 1951 〈VA〉「建てること 住まうこと 思惟すること」
- *Was Heißt Denken*, 1952 〈VA〉「思惟とは何の謂いか」

ハイデガーの論考に関しては、数多くのもので出版されているが、その中から厳選して選択されたものが挙げられているように見える。すなわち、ここで挙げられた論考を読んでもと、「人間」、「建築」、「環境」(場所、空間)、「歴史」(時間)を課題として論述されたもののように見受けられるのである。つまり、増田が「建築的思惟について」を論考・論述する際に、ハイデガーの存在論を援用したのであるが、その存在論の中でもとりわけ、人間・空間・時間・建築を論考課題としたハイデガーの論文(講演)が取り上げられているとみることができる。そして、そのことは、次に示すように、「建築的思惟について」の章立てにも見て取ることができる。

3. 「建築的思惟について——存在論的建築論のために」(一)の内容

「建築的思惟について」の読解を進めていくに当たって、ここでは、「建築的思惟について」(一)の論文構成から確認していきたい。

先述のように、論文の全体は、(二)と同様、10項目の章立てによって構成されている。ここで、(二)によって確認できる10項目を列記すれば、以下のようになる。

1. 日常性、2. 存在論的差異 / 3. 現存在、4. 脱自存在 / 5. 時性
6. 思惟すること、7. 創作すること /
8. 住まうこと / 9. 空けること、10. 建築なるもの

10という数による分節にも意図を感じることができるが、上記のように列記してみると、前半5項目は名詞、後半5項目は動名詞による項目名となっていることを確認することができる。そして、この項目を論文内容に照らしてみると、この明示的で「対称的」な前半・後半の分別は、そのままハイデガーの前期・後期思索に重ねられていると類推することができる。すなわち、前半は、『存在と時間』による世界分析と世界経験の究明として、脱自的にある現存在の世界内存在の自覚と性起の内実がハイデガーの存在

論解釈を通して論述されている。後半は、ハイデガーの後期思索のなかでも、特に「建築」に関わる「芸術作品の根源」、「物」、「建てること 住まうこと 思惟すること」、「思惟とは何の謂いか」から、「思惟」Denken、「創作」Dichten、「住まう」Whonen、「空ける」Einräumen、「建築」Bauenの鍵語を取り上げ、「建築的思惟」すなわち、真の〈「建築」へ向けての「思惟」〉を通して、「建築なるもの」の究明を試みている。また、前半・後半を通して、副題「存在論的建築論のために」のタイトル通りに、増田によるハイデガーの「存在論」解釈を介して、あるべき「建築論」の所在究明を試みるものとなっていると考えられる。

次に、論考の内容を概観的に顧みていきたい(以下、「建築的思惟について」の概要を述べるに当たって、上述のように、読解のための補助線として、増田の文に適宜、括弧、記号、下線、ドイツ語を付して論述を進めていく)。

まずその動機は、ニヒリズム、ヒューマニズムによって、Sein, Seinselbst〈あるそのこと〉(存在、有)を忘れた日常世界の実状に求められていることを確認することができる。すなわち、〈あるそのこと〉の忘却、さらには、「存在忘却」Seinsvergessenheitの忘れ去りに起因する「故郷喪失」Heimatlosigkeitは、人間中心主義の近現代技術(建設技術を含む)によって景観荒廃を加速させているというハイデガーに促された日常世界の自己省察が論文執筆の内的動機となっていることを序文から確認することができる。

その景観荒廃は、建物が建てられている個々の諸場所が、そもそもそれとしてそこに〈あるそのこと〉の意味が問われることなく、すなわち、自らの拠って立つ場所としての「故郷」の究明が為されることなく、同一性(Identität)が見失われた状態のままに^⑧、人間中心主義の技術的建設物によって、大地が埋め尽くされていることに拠ると増田は見ている。〈あるそのこと〉が顧みられることのないままに思惟なく行われる建設行為は、「故郷喪失」(虚無的に、自己を見失うという意味でのアイデンティティーの喪失)故の「故郷喪失」(アイデンティティーの喪失)を繰り返し再生産し、負の循環を回し続けることになる。

そのように、〈あるそのこと〉を忘れた「日常性」(存在次元の[あるもの])が普遍し、大地が荒廃し尽くされていくのは、そもそも、「存在次元 ontisch (存在次元 [あるもの])」と「存在論的次元 ontologisch (〈あるそのこと〉を問う知)の差異への関心が失われていることに拠り、それ故、先ずは、世界における「存在論的差異」ontologische Differenzの事実を知り、〈あるそのこと〉へ聴従すること ge-hören、さらには、[あるもの] Seiendeが存在論的には、〈あるそのこと〉へ向けて企投的に「ありうるもの」Seinkönnenと〈あるそのこと〉において被投的に「あらしめられるもの」Seinlassenという指向的かつ両義的な存在としてあることを思惟することが究められるとする。これが、「建築的思惟につい

⑧ 「おのれ自身が、かけがえないおのれ自身である(p.231)わけではなく、「人である(p.231)ことではない不確かで虚ろな虚無的状态。

⑨「現」は、「存在論的なあるところ(p.232)。すなわち、存在論的「場所」である。また、「人は、現-存在の現に、〈あるそのこと〉の明るみのうちに、脱自的にある、そのような脱自的あり方において人は、[あるもの]の全体をも超えている(p.235)」とされ、[現]が、「あるそのこと」の明るみのうち」と同義であり、「[あるもの]の全体を超えている」世界と解されている。

⑩「性起 Ereignis」は、「自己自身と〈あるそのこと〉との相互に適合しあうその適合 ge-eignet Eignen を直接に経験(p.233)することであり、「人がまさしく人で〈あるそのこと〉の自覚にほかならぬ(p.233)」としている。

⑪「開けの明るみのもとで、すなわち現-存在のその現で、現-存在は自己自身に、したがってまた、[あるもの]のあるのに出会う(p.233)」と(注9)を参照。

⑫「現存在は、現-存在である、注目する er-äugen そのことによって、〈あるそのこと〉をそれ自身へと招きよせながら、現存在が、それを〈わがもの〉にする an-eignen、すなわち、〈性起〉させるのである(p.235)」としている。また、「同一性 Identität」は、「おのれ自身が、かけがえのないおのれ自身である(p.231)」、「人の人である(p.231)」ことを意味している。

現存在と〈あるそのこと〉の距離に関しては、以下のように詳述されている。

【現存在】●現存在は、「〈あるそのこと〉に直接に出会うことは不可能(p.234)であるが故に、[あるそのこと]の明るみ(p.234)に導かれて、「[あるもの]のあること(p.234)」の「最近に迫りながら、その近さのうちにとどまらざるを得(p.234)ない。つまり、現存在は、「あるそのこと」にとりのこされて(p.234)、「[あるもの]の傍らに(p.234)」とどまる。

【あるそのこと】●あるそのことは、「[あるもの]を〈あるそのこと〉の明るみのうちに(p.234)あらしめながら、その「[あるもの]のうちへと脱去(p.234)する。●〈あるそのこと〉をあらしめるのは、「あるそのこと」にほかならぬ(p.234)。

⑬「[あるもの]の全体の〈ただ中〉に、現存在は、それらの[あるもの]たちとともに、投げ出されているのである。投げ出すのは〈あることそれ自身〉であって、ほかの何ものでもない(p.233)」とされている。ちなみに、「あることそれ自身」は、(二)では、「あるそのこと」に訂正されている。

⑭「[あるそのこと]が、隠れとして、隠れのままに、自からを露わにするのである。〈あるそのこと〉の真実 a-letheia とはこのことにほかならぬ(p.237)」としている。

て(一)の1. 日常性、2. 存在論的差異の概要である。

そして、論考のなかでの「あるもの」が、存在論的次元において、「あらしめられるもの」と「ありうるもの」として両義的にあるという指摘によって、次の二つの文章が導かれている。

●人は、自からが[あるもの]であって、

〈[あるもの]たちのただ中〉にあることを知る。(p.232)

●[あるもの]でもあるところの人は、しかし、ほかの[あるもの]とはちがって、[あるもの]ではなくもある。(p.232)

上は、人が被投的に場所的存在であることを自己了解 Selbstverständnis していることを示しており、下は、企投的に脱自的(非-)存在であることを意味している。以下、場所的存在、脱自的存在という言葉を鍵語として、3. 現存在、4. 脱自存在の概要を確認したい。

すなわち、人は、脱自的(非-)にありうるが故に、自らを脱し(自らを抛り所とするのではなく)ec-stasis、場所においてあるという場所的存在として実存している ec-sister ことを知ることができる。人が、脱自的(非-)にあることができるのは、そもそも人が、前存在論的に、場所的存在(世界内存在)としてあることを「存在了解」Seinsverständnis しているからである。

その「存在了解」を喚起するのは、情態性(気分・雰囲気)である。ある雰囲気(空間)に拠って、気分づけられることを契機として、「存在了解」のことが顧みられる。そのため、その雰囲気(空間)をいかに構成するかが、建築家の課題となる。

また、人は、場所的存在であるが故に、ハイデガーによって「現存在」と名づけられる。人が脱自的に「現-存在」としてある時、現なる世界が開示するとともに⑨、〈あるそのこと〉が(換言して、存在が存在として)「性起」し⑩、現存在が、場所的存在として、「世界-内-存在」であることが「自覚」されるのである⑪。すなわち、この瞬間、「あるもの」としての人が、現存在として自らをわがものにし an-eignen、同一性(アイデンティティー)、すなわち、「自覚」が成立する⑫。この時の世界とは、「あるものの全てではない」存在論的地平のことを言い、現存在も、あくまでも、存在論的地平においてある存在である⑬。そして、現存在の自覚は、〈あるそのこと〉の真実 a-letheia (非-覆蔵性)⑭に内在する「脱自性」a- (非-性)に支えられている。

また、人は、本来的に「死に得るもの Sterbliche」として実存するが故に、(現

⑮「人の人として〈あるそのこと〉の性起 Er-eignis と一つなる〈思惟する〉し方 (p.237)として、「〈あるそのこと〉の脱け去りへと目を凝らせ er-äugen, 〈あるそのこと〉の言いつけ Geheiß へと耳を傾け hören, 〈あるそのこと〉のありのままに聴従し gehören ながら (p.237) あることの大切さが説かれている。すなわち、「思惟すること」は、「目」、「耳」といった身体をともなった行為とその全体を喚起する「聴従」と訳される ge-hören というあり方に専心することによって成立する、言わば「身心一如」の行為であることを確認することができる。「思惟すること」によって言われる sagen も、あくまでも身体性をともなうて「吹き言う (p.237)」と訳されているところに、建築家増田友也のハイデガー解釈の独自性が表されていると見ることができよう。

⑯「思惟するそのことは、〈あるそのこと〉の、言わばこの不気味さのうちに踏みとどまり、そうして、去りゆく〈あるそのこと〉を、明晰に言葉として、言葉において、顕し出す。〔あるもの〕を、まさしく〈あるもの〉であるとして、そのありのままに委ねつつ、見まもるとはこのことであるが、それはまた、詩作すること Dichten にも通じる (p.237) としている。

⑰「思惟」と「詩作」、すなわち、〈吹き言うこと〉と〈名づけること〉の関係については、「もの名とはこのようなものであるが、それはまた、〔あるもの〕の〈あるそのこと〉の近さでの、根源的な安らぎにおいて、その〔あるもの〕がまさしく〈そのもの〉であるとして、それで〈あるそのこと〉を吹き言うことを、同じような〔あるもの〕としてある言葉のうちに、量りつつ、移し入れることにほかならぬ (p.238)」とされており、この文章をかいつまんでみれば、「名」とは、〈あるそのこと〉を吹き言うことを、「言葉」のうちに、量りつつ、移し入れることと解することができる。すなわち、吹き言われたコトが、コト葉に移し入れられたものが、「名」であり、「思惟」によって「吹き言われた」コトを名づけることによって「言葉」がもたらされ、「詩作」が成立するという両者の関係を確認することができる。そして、「〔あるもの〕が、まさしく〈そのもの〉であるとして、〔言葉〕のうちに喚び起される (p.238)」のである。

⑱ 日本建築学会編：『建築論事典』、p.17、彰国社、2009 (第1版第2刷)。辻村公一訳：『思惟の

に、既にして)、未来的に〔あるもの〕である。人は、そのように、自らを全否定する「死」に出会うことに拠って、元来、未来的、脱自的存在 (非-存在) であることを知る。それ故、先駆的存在とも言われる。そして、その「死」という未来的、脱自的 (非-)「可能性のうちに自からを委ね、委ねるそのことにおいて、実存の被投性 Geworfenheit を自からに引きうける (p.236)」ことによって、〈あるそのこと〉が性起し、現存在の自覚が成立する。つまり、人が、本来的には (そもそも) 死につつ〔あるもの〕 (非-存在) であることを自覚するとともに、世界内存在 (現-存在) としてあることが自覚される。また、この時、「本来の現在において、未来的なこと、過去のことが同時に gleichzeitig 生起する、時間が時熟する Zeit zeitigt (p.236)」と言われるのである。そして、「〈そのそこ〉で現存在は、〈あるそのこと〉の閃きに立ち会う (p.236)」と言う。以上が、5. 時性を含んだ概略である。

ここまでが、前半の概要であり、『存在と時間 (有と時)』の増田によるアブストラクト的解釈の内容のさらなる概説である。

後半は、6. 思惟すること、7. 創作することから、論考・論述が行われる。

すなわち、「思惟すること」に関して、先ず、人が場所的存在であることを「知る」と、世界内存在としての自覚、および、〈あるそのこと〉の性起、さらに、本来的「思惟」の生起が、同時の出来事であることが言われている。また、その時、「〈あるそのこと〉が〔あるもの〕のうちへと脱け去る entziehen (p.237)」ことも起きる。さらに、その際、〈あるそのこと〉の性起 Er-eignis と一つなる「思惟すること」は^⑮、性起とともに去りゆく〈あるそのこと〉の言いつけを吹き言い sagen、明晰に「言葉」として顕し出すように向けられる。

その「思惟すること」は、「まさしく〈あるもの〉である^⑮」〔あるもの〕のありのままに委ねつつ、見まもることとして行われるが、それは、〔あるもの〕の〈あるそのこと〉の呼びかけに応じて、〈あるそのこと〉の真実 aletheia を言葉のうちへと移し入れ、〈あるそのこと〉を名づける nennen 「詩作すること」と響き合せて起きると言う^⑰。それ故、「思惟することにも、詩作するそのことにも、〈あるそのこと〉の言葉のうちへの隠れが、隠れとして、隠れのままに、それらの〔あるもの〕の〈あるそのこと〉が、それらの言葉のうちに露わにされる (p.238)」ことになる。

この点に関して、田中喬は、ハイデガーの『思惟の経験より』の^⑱「歌 (詠) と思惟とは詩作から生う隣り合った雙樹である。／彼等は妙有 Seyn から生い立ち、彼等の根は妙有の真実に達する」を引き、「建築的思惟について」を補完している^⑲。

上記のことから、「存在論的建築論」は、「言葉とは、〈あるそのこと〉の家

経験より, p.25, 理想社, 1960年
参照。

ここでは、思惟に対する詩作の
根底性が暗に指示されているが、
「建築的思惟について」は、論文主
題からもうかがえるように、あく
までも、思惟から建築へ向けての
論考であり、全体として、思惟の
優位性と住まうことに対する建築
することの優位性が示されている
所に、増田の建築家としての拘り
を見出すことができる。

19 Die Sprache ist das Haus des Seins.
(Martin Heidegger, "Brief über den
Humanismus," Wegmarken, S.311, 2.
Aufl., Klostermann, 1978を参照。)

20 「〈思惟すること〉にも、〈詩作す
ること〉にも、〈あるそのこ
と〉の言葉のうちへの隠れが、隠
れとして、隠れのままに、それら
の「あるもの」の「あるそのこと」
が、それらの「言葉」のうちに隠
れにされることになる (p.238)」
とされている。

21 日本建築学会編：『建築論事典』、
p.16, 彰国社, 2008 (第1版 発
行)。

22 日本建築学会編：『建築論事典』、
p.16, 彰国社, 2008 (第1版 発
行)。

23 日本建築学会編：『建築論事典』、
p.17, 彰国社, 2008 (第1版 発
行)。

24 「創作することとは、[あるもの]
としてはありませぬ 〈あるその
こと〉の真実を、作品のうちに移
し入れるそのことによって、〈そ
のもの〉であるところの[あるも
の]の真実を、〈そのそこ〉に性起
させるそのことにほかならぬ
(p.239)」とある。

25 「〈あるそのこと〉の明るみが、輝や
き Scheinen として、作品のう
ちに蔽れこまれるのである、美し
さ Schöne とは、〈あるそのこと〉
の真実 a-letheia が、輝やきとし
て現成するそのし方にほかなら
ぬ。それが、作品として [あるもの]
を、明るくし leuchten, 響かせる
klingen ののである (p.239)」とある。

26 「創作することと、創作され
るそのものとの間にある存在論的
差異が、互いに異化し、同化しつ
つ、量りあうそのことにおいて、
それを創作することとして、
本質的に現成することにほかなら
ぬ。すなわち、創作するとは、創
作すること自身のうちへと創
作することにほかならぬのである
(p.239)」とある。

(p.238)「Die Sprache ist das Haus des Seins.¹⁹⁾」と言われるその「詩作」・「思惟」に拠
る言葉で²⁰⁾、論じられることによって、真実の論となる。この「論」以前の真実
の「言葉」の発露に着眼して論考・論述を試みた所に、増田の建築論が『「建築-
論の論」への嚆矢²¹⁾』、『「論考・論述」への現象学的-存在論の精緻を尽くした
建築論²²⁾』(田中喬)と言われる所以がある。さらに、「本論の関心は [Denken・
Dichten] にある²³⁾」としている。

加えて、増田は、建築すること Bauen と造型すること Bilden は、思惟による
「呟き言う」Sagen と詩作による「名づけ」Nennen の開示によって起きると言う。
「建築すること」の基礎に〈思惟〉・〈詩作〉があり、それが「呟き言う」と「名づ
け」による「言葉」の発露として生起し、行われると言われている所に、建築活
動における「建築論」という言論の必然性を見て取ることもできよう。

他方で、建築論は、他の論と異なって、「建築」の論であるが故に、存在論的
「建築」の意味が問われる。「建築」は、名詞として [建物]、[建築作品]、あるい
は、動詞として〈建築する〉という意味を表すが、その建築作品は、芸術作品と
して「創作されるもの」であり、「詩作すること」に基いて、〈あるそのこと〉の
真実を言葉(詩作)・作品(創作)に移し入れることによって形成される。そして、
〈そのもの〉であるところの [あるもの] の真実を²⁴⁾、〈そのそこ〉に性起させる。
すなわち、芸術作品(建築作品)としての「創作されるもの」は、「ないものでは
ない」[あるもの]としてあり、〈あるそのこと〉の真実を「輝き」Scheinen として
現成することによって、それは、美しく Schöne、明るく leuchten、響く klingen
ものと成りうるのである²⁵⁾。そして、その作品とは、「ありとあらゆる [あるも
の]」を、それ自身のうちに集めてあるところのもの、つまりは、〈あるそのこと〉
の logos において [あるもの] (p.239)」とも言われ、[あるもの] と logos の親
密なる相関性が明らかにされる。加えて、作品は、〈あるそのこと〉の真実をあ
らしめるべく創作されているが故に、[あるもの] の〈あるそのこと〉を見まも
る眼を要請するのであって、作品に向き合う視点(と立場)の重要性が説かれて
いる。

そして、そのような作品の「創作」は、〈創作すること〉と〈創作されるもの〉
との存在論的差異が、互いに異化(差異)し、同化(同一)し、量り合うことによっ
て成立する、と増田は言う²⁶⁾。

その「創作」、「建築」に対して、8. 住まうこと で、「住まうこと」の内実が
説かれる。すなわち、そのような「創作」に基づく「建築すること」Bauen は、
古語 buan に由来し、その buan は、「住まうこと」Whonen の古語でもあり、さ
らに、buan は、「私が 私であり Ich bin, あなたがあなたである du bist」の
bin, bist (…である)の語源でもあることから、両者が「あるもの」を〈そのもの〉

としてあらしめ、人が人であることをあらしめることとして、すなわち、同一性 (Identität) を想起・生起させ、〈あるそのこと〉の性起に基づくこととして、両者の親密性と相関性が明らかにされるのである。

⑦ 「住まう」とは、「あるそのこと」の明るみのうちでの「あるもの」との出会いにおいて、〈あるそのこと〉が、その「あるもの」のうちに脱け去るままに聴従しながら、それに耐えて、〈そのそこ〉に、〈あること〉への近さのうちに、踏みとどまるそのこと (p.240) とされる。

⑧ 中村貴志訳編：『ハイデッガーの建築論——建てる・住まう・考える』p.12, 中央公論美術出版, 2008

⑨ 中村貴志訳編：『ハイデッガーの建築論——建てる・住まう・考える』p.20, 中央公論美術出版, 2008

⑩ 「現存在は、その脱自存在の、存在的と存在論的との二重の次元 Dimension の均衡において、〈あること〉への近さのうちに住まうのである (p.241)」とある。

⑪ 「ものとは、Heidegger によれば、天と地、神格なものと死にうるもの の四者 Vier の方域 Geviert を、自からのうちに集撰し、性起せしめつつ、滞在させる、そのようなものである、という (p.241)」とし、また、「ものがそのもので〈あるそのこと〉のうちに、方域が集撰されている、ということは、ものが自からを方域に空けわたしている ein-räumen ことであり、この空けわたしのうちに、そのありどころ Ort がある (p.242)」とある。

⑫ 「ものがものである ということは、そのうちに、天と呼ばれる [あるもの]、地と呼ばれる [あるもの]、神格な [あるもの]、死に得るもの、つまりは、ありとあらゆる [あるもの] の、それぞれに、〈あるそのこと〉との存在論的差異において、それらのものとその差異との、相互の反映と反照と、相互の拮抗と均衡とにおいて、多様なし方で 〈あるそのこと〉を、それ自身のうちに集撰しているのである。それゆえに、ものに出会うとは、ものがもので〈あるそのこと〉のうちにとどまって、そのもののうちに集撰されているこのような事象に委ね、引きうけること、つまり、そのことに聴従することにほかならぬ。〈そのそこ〉が、まさしく出会いのその場所、会域 Gegnet である (p.242)」

そして、その「住まうこと」とは、〈あるそのこと〉を注意ふかく見まもりながら、〈そのそこ〉に滞在することによって成立する根源的な出来事とされる^⑬。また、「住まうこと」は、「〈思惟すること〉として 〈建築すること〉(p.243)」によって成立する建築的なあり方でもあるとする。

ハイデッガーの“Bauen Whonen Denken”で、「パウエンとは、本来、住まうことである」(中村貴志訳)^⑭とされているように、〈建築すること〉は、〈住まうこと〉に拠り、〈住まうこと〉として成立するが、同時に、「〈住まうということ〉は、四者の会域を事物の内に保つかぎり、そのような守護として〈ひとつのパウエン〉である」(中村訳)^⑮とされているように、〈住まうこと〉は、〈建築すること〉に拠り、〈建築すること〉として成立する。

これらのことから、増田は、〈住まうこと〉と〈建築すること〉の両義相即性を明確に指摘する。それは、両者ともに同じ「…である」に由縁する古語 buan に由来していることに拠る。

そして次のように言う。

「人が、人として〈あるそのこと〉によってのみ、真に住まうそのことにおいてのみ、〈そのそこ〉が建立され、〈そのこそ〉が家 Haus となるのである。人は家に住む（「住まう」とされておらず、単なる付置の意味）のではない、それを建築するのである (pp. 240 - 241)」(引用文内の括弧および丸括弧内文章と下線は引用者)

そのように「住まうこと」は、脱自的存在としての現存在が、[あるもの] でありながら [あるもの] ではないものとして、すなわち「存在的と存在論的の二重の次元 Dimension の均衡」^⑯において、現に開かれ、現 - 存在として世界内存在であることを自覚することによって成立する。その際、「ものはものとなる Ding dingt (p.241)」。

9. 空けること、10. 建築なるもの では、その「もの」と「建築なるもの」の意味が明らかにされる。

「建築なるもの」は、〈建築 - なる - もの〉として、現象学的に、現れつつ象り成る建築的「もの」として解釈され、その「もの」(Ding) は、四者 Vier (天・地・人・神) の方域 Ge-viert を自らのうちに集撰し、性起せしめつつ、滞在させるとともに、自らを方域に空けわたし ein-räumen、ありどころ Ort を開き、真実のものとしてあるとされる^⑰。

それは、別に、「ありとあらゆるもの」と〈あるそのこと〉との存在論的差異において、相互の《反映・反照》・《拮抗・均衡》において、〈あるそのこと〉をそれ自身のうちに集撰しているとも言われる^⑱。この文章に関しては、(二)で、「差異・同一の両義の両義 (の両義) が重層的に「論理」に徹して説かれる」(田中

④⑤ 日本建築学会編：『建築論事典』, p.17, 彰国社, 2008 (第1版 発行)。

④⑥ 「〈住まうそのこと〉は、〈思惟すること〉として〈建築すること〉であり、〈建築すること〉は、〈思惟しつづつ〈詩作すること〉である(p.243)』とも言う。

④⑦ 「思慮して知ること(p.243)は、「作品にそのありどころ Raum を、創作しつづつ〈あるそのこと〉にその道すじ Weg を、そうして、それを護持するそのことにその立場 Standort を用意する(p.243)」とされ、「建築なるもの」への問いに対して、「知」こそが、〈ありどころ Raum〉〈道すじ Weg〉〈立場 Standort〉を示し、その問いに目的・方法・立場を与える契機となることが知らされる。

喬) ことになる^{④⑤}。この点に関しては、別稿にて詳述することになろう。

以上をまとめると、「建築なるもの」とは、脱自的に、世界内存在であることの現存在の自覚と〈あるそのこと〉の性起を契機とする〈思惟〉・〈詩作〉に拠って成立する「住まうこと」・「建築すること」に基づいて構築された[もの]であり^{④⑥}、「建築なるもの」が、〈あるそのこと〉の性起と相即し、方域を空け、ありどころを開く、その「もの」として、真の〈建築－なる－もの〉と成る時、「人が真実に人であり」、「あるものが真にあるものである」(p.228) ことが反照・相関的に成立するという主旨理解ができるように思われる。そして、さらに言えば、建築家とは、ニヒリズムやヒューマニズムに陥り、表象的対象物としての建設物を単に使用を目的として生産する人のことではなく、「建築以前」の〈あるそのこと〉へ立ちかえり、〈そのそこ〉で存在論的差異に注目しつつ、〈思惟すること〉として、「存在論的思惟」のうちに「建築論」を取り戻し、常に「建築なるもの」への問いを深め、思惟しつづつ詩作することとして、住まい建築する人であると自省的に顧みることとして、増田はこの論文を執筆したのであろうと解されるのである^{④⑦}。

4. 「存在論的建築論」ということ

ここまで見ていくと、増田が「存在論的建築論」と言ったことの意味がわかってくるように思う。

敗戦後、シベリア抑留を経て、帰国し、京都大学において建築活動を再開することになる増田が直面したのは、「国破在山河(国破れて山河あり)」の国土であったろう。戦後数十年、国全体の動向としては、復興をかけた、国土開発が進められていくこととなるが、その実情は開発による自然破壊と秩序なき建設行為によって惨憺たる景観を生み出している姿を露顕するものであった。

1960年代末には、復興の気運も一山を越え、景観問題や公害による環境問題が取り上げられるようになる。増田にとって、切実であったのは、「まもらべき京都の風景とは何であるか」ということであった。増田自身が、歴史的・場所的存在として、歴史・場所に即してある建築家として、歴史的現在の日本の京都という場所においてあることのアイデンティティーの自覚が要請されていた。日本らしく、京都らしく、その地域の諸場所の特性に相応して、歴史的にある現存在としてのアイデンティティーが自覚されうる建築とは如何にあるべきかが課題となっていたのであろう。そして、そのことは、言葉を換えて言えば、忘却の彼方にある「故郷」の想起であり、自らの「故郷」に建てることとして、その都度の建築活動を行うことであり、さらには、それは「Ethnosの風景」を希求することとして自覚されていたのであろう。その限りで、「人が真実に人である(p.242)」、「あるものが真にあるものである」ことが、如何に

③ Martin Heidegger, "Vom wesen des Grundes," S.38, 6. Aufl., Klostermann, 1973 を参照。

成立するかが問題にされたということであり、その問いに答えるべく、ハイデガーの存在論が招聘され、「存在論的建築論」の構築が究められたのである。そして、そのようなアイデンティティーの自覚を促す「存在論的建築論」は、〈あるそのこと〉「のために」(Das Dasein existiert umwillen seiner.^③)あることの自覚、すなわち、脱自的に世界内存在としてある現存在の自覚と性起とともに真に生起する思惟と詩作に拠って、眩き言いつつ・名づけ、表される言葉に拠って構築される論として明らかにされる論考・論述であった。そして、そのような思惟と詩作に基づく「存在論的建築論」の構築とともに、「住まうこと」、「建てること」が成立し得るのであり、真の「建築なるもの」は、そのような思惟・詩作、住まうこと・建築することに支えられて、天・地・人・神の方域を集撰する「もの」として、会域を「空け」つつ、構築されることが期待されていたのである。そして、その「建築なるもの」が成立し得た時、人は真に人であり、ものは真にものである。すなわち、あるものの各々のアイデンティティーが成立する。その中で、建築家には、そのようなアイデンティティーの確立へ向けて常に思惟しつつ詩作することが求められており、さらには、「存在論的建築論」を構築しつつ、「住まい」「建てる」ことが求められているのである。「存在論的建築論」とは、そのような意味をもって言われているのであり、そのことを言うとともに、常に、そこが初まりとなる事態としての〈あるそのこと〉の自覚が促されている言葉(建築論)として捉えることができよう。